
へんじがない、ただのしかばねのようだ。

あんこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

へんじがない、ただのしかばねのようだ。

【Nコード】

N6957Y

【作者名】

あんこ

【あらすじ】

異世界で目覚めた主人公。事故にあったはずだが、なぜか自分はグールになっていた。彼はこの異世界でどう過ごし、どう生きていくのか。

主人公はチート級になっていく予定。
魔物進化系です。

死体遺棄は犯罪です（前書き）

魔物進化系の小説が好きなので書いてみようと思いました。処女作です。

誤字、脱字。文法がおかしいところの指摘。その他感想などよろしくお願いします。

死体遺棄は犯罪です

（どこだここは…）

目を覚ますと周りには鬱蒼と生い茂る木々。空を見上げてみると赤い月、どうやら今は夜のようだ。

赤い月なんて珍しいな、夜にしては随分と明るいな、などと呑気なことを事を考えてるうちに一つの疑問が湧いてくる。

（俺、こんな所で何してんだ。）

本来ならば真つ先に疑問に思ふべき事柄にようやく気付く。どうやら此処は森の中の少し開けた場所のようだ。

だが俺には森に來た覚えもないし、森に行くような予定もなかったはずだ。

なぜ自分が此処に居るのか必死に思い出そうとするが、頭に靄がかかったように、思考がなかなかまとまらない。

数分、或いは数十分経っただろうか。随分と長い間頭を抱えていた気がするが、ようやくと思い出した。

（そうだ、俺…）

そうだ、俺は車に轢かれたのだ。

夕食のあと、小腹が空いたので近くのコンビニに。その帰りに信号無視、加えて無灯火で走ってくる車に撥ねられたのだ。

しっかりと左右確認をしていれば避けられた事故かもしれないと、今更ながら後悔する。

だが車に轢かれた自分がなぜこんな森の中に。

もう一度周りを確認してみるが、どう見ても森の中だ。当然道路なんてどこにもない。

考えられる可能性は一つ。そう、死体遺棄だ。

信号無視に無灯火運転で人ひとり撥ねてしまったのだ。厳罰は免れないはずだ。焦った運転手は、俺が生きてるのを知ってか知らずか、事故をなかったことにしようとしたわけだ。

だが残念。俺は今もこうして生きている。運転手の目論見は見事に失敗したわけだ。ナンバーを確認できなかったのは残念だが、今は街中の至る所に、それこそ普通の民家にまで監視カメラが設置されている時代だ。そう簡単に警察から逃げ切れるものではない。

心のなかでほくそ笑みながら、とりあえず運転手の事は頭の隅に追いやる。

さて、今一番に考えなくてはならないのは、ここが何処かだ。

周りの状況から察するに、ここが森の中なのは明白。死体遺棄の定番のような所だ。

俺は決して体重が軽いわけではない。同年代と比べても普通と言える基準には達している。それに俺を轢いたのは車だ。

俺を此処まで、とは言わないが、近くまで運ぶのには十中八九車を使ったと見て間違いないだろう。

車が走れるということは道路がある。

道路が通っていれば、それを辿って人に出会うことは難しくない、はず。唯一の心配は此処が日本の何処かだ。

あまりにも山奥だと、人に出会う前に力尽きて、そのままお陀仏。なんて事も十分にあり得る。

（まあ心配してどうにかなる訳じゃないか。）

懸念を消し去ることはできないが、今は考えてもどうにかなるわけ

じゃない。いつまでも怯えて何もせずに体力を消耗するのは愚の骨頂。

そう思考を切り替えて、俺はさっそく行動を起こすことにする。幸いにも月が明るいお陰か視界は良好。いつもよりも良い気さえしてくる。

（不幸中の幸いだな。）

自嘲気味な笑みを浮かべながら、怪我の有無を確認する。

今まで体の何処にも痛みを感じなかったので失念していたが、仮にも車に撥ねられたのだ。骨折や大怪我をしていてもおかしくない。

（首：は大丈夫そうだな。腕も問題なし。足：も大丈夫そうか…）

そうして身体の隅々まで確認して、最後に足を確認しようと靴を脱いだところで思わず目を見張る。

左足の親指がないのだ。文字通りなくなっている。目覚めてから一番大きい焦燥感が俺を襲う。

（ゆ、指がない！？）

思わず周囲に目を走らせるが、自分の指らしきモノは見当たらない。

（事故の時か！？もしかして壊死！？）

焦りながらも左足、もう親指とも呼べなくなってしまった患部を見る。

断面には白い、骨の様なものが見える。痛みを感じないのは壊死してるからだだろうか。医学的な知識には乏しいが、とにかく早

く治療しなければならぬと言ふことは分かる。

急いで靴を履いて起き上がる。が、妙に体が重い。

体を見下ろすが、外見的な異常はさっきの親指だけだ。

もしかしたら轢かれた時に内臓にダメージを負ったのかもしれない。これはとうとうヤバくなってきた。

焦りながらも致命的な失敗をしないようにしっかりと思考する。

ここは森の中だ。闇雲に路を探して彷徨えば、さらに森の奥深くに進んでしまう危険がある。

幸い今いるのは森の中でも開けた場所だ、ここを中心に辺りを探索してみよう。

路は思いのほかすぐに見つかった。

探索を始めて十数分。近くに小道があるのを発見したのだ。車が通れるほどの道幅はないが、人ひとり通るのには十分すぎる大きさだ。

少しの安堵を感じながら道を進み始める。どちらに進むべきか迷うと思ったが、反対側は進めば進むほどに草木が茂ってるようだったので、こちら側に進むことに決めた。

両方向に綺麗な道が続いていなかったのは有難かった。

またもや不幸中の幸いだ。もしかしたら神様は俺に生きると言っているのかもしれない。

心の中で神に感謝しながら路を進む。

どれくらいの間歩いただろうか。既に東の空が白んで来ている。心なしか時間が経つに連れて体が重くなってきたようだ。

あれから数時間。太陽はもう完全に顔を出して、今は強烈な朝日で俺を照らしている。

歩いても歩いてても、向かう先は路、路、路。だが、少しずつ道幅が広がってきている。今では車一台なら余裕で通れるだ。

なんの変化もない路が続いていたら、俺の心はとつくに折れていたことだろう。

疲れは感じないのに体が重い。事故のせいで感覚がおかしくなっているのかもしれない。

さらに数時間。太陽の位置から考えて、今はもう昼頃だろう。

体が重いせいで歩行速度は普段より数倍劣るが、それでも既に数キロは歩いたはずだ。

そろそろ何か変化がないと、いい加減心が折れそうだ。

そんな事を考えていると、木々が途絶えている場所が見えてきた。とうとう森の出口に辿り着いたのだ。

出口の向こう側には、さらに大きな路が見える。車三台は余裕で通れる道幅だ。

コンクリートで舗装されてはいないが、砂利が敷き詰められていてきちんと人の手で整備されてる事が窺える。

久々に人の匂いを感じさせる人工物に、体のダルさなど気にならなくなる。

足取りも軽い。

路に気を取られていたせいで気付かなかったが、出口の脇。木の陰で眠っている人影を発見した。

二十代前半の青年で、実に気持ちよさそうに眠っている。

人を見つけられた安堵と、そのほのぼのとした光景に思わず笑みが

溢れる。

（路を…まずは病院の場所を聞いてみよう。車があるなら乗せてもらえるように頼むか。）

などと考えながら、青年に近づいて声を掛ける。

「おおおお」

自分の声に自分で驚く。確かに「すみません」と言っただけなのに、出てきた言葉は「おおおお」だ。
おかしい。もう一度「すみません」と言ってみる。

「おおおお」

駄目だ。なぜか口から出る言葉は「おおおお」だ。

（もしかして事故のせいか！？頭を打ったのかもしれない。大変だ！早く病院に行かないと！）

そんな事を考えていると、寝ていた青年が目を覚まして、まだ眠たげな目でこちらを見る。

「なんだ…？う、うわっ、なんでこんな所に魔物がいるんだ！？」

俺を見てそう叫ぶ。一応周りを確認してみるが、自分と青年以外に人影はおるか動物さえ見当たらない。

（ま、魔物って…）

確かに俺はお世辞にもイケメンと言える顔ではないが、魔物と言われたのは人生で初めてだ。

（あ、あれ…？な、泣くな俺…泣くんじゃない…）

目尻に涙が溜まる。自分の心がここまで繊細だとは思わなかった。人に悪口を言われて泣きそうになった事など、今までに一度たりともない。

面と向かって悪口を言われた事が、人生で数えるほどしかないのも起因してるしているとは思うが、さすがに魔物はないと思う。魔物は。

そんな俺の心境も知らずに、青年は好き勝手に叫び続ける。

「しかもグールじゃねーか！？何で真昼間からこんな所にいるんだよ！」

（グール…）

俺の涙腺はもう決潰寸前だ。

気持よく寝てるところに突然声を掛けたのは、確かに悪かったと思う。

だがそれだけで魔物呼ばわり、拳句の果てにグールときた。あまりにも非道い暴言に、今度は青年に対してふつふつと怒りが湧いてきた。

（俺と歳もそう変わらないくせに好き勝手言いやがって！）

前半部分は完全に言い掛かりだが、頭に血の上った俺はそんな事には気づかない。

怒りを孕んだまま、大きな声で怒鳴りかかる。

「おお おおお おおお！」

だが出る声はやはり「おお おお」である。自分の声を聞いて冷静になるとはおかしな話だが、急激に自分が冷めていくのを感じる。

冷静に考えれば、こんな所で怒鳴り合ってる場合ではない。早く病院の場所を聞き出さなければ。

車はこの様子では期待できないか。

だが、「おお おお」でどうやってコミュニケーションを図ろうか。そんな事を考えていると再び青年の怒鳴り声が耳をつらぬく。どうやらさっきの俺の怒鳴り声でさらにヒートアップしてしまったようだ。

「や、やろうつてのか！グールの分際で！」

そう言う青年は、脇に置いてあった荷物の一つを手にとった。

青年が手に取ったものは剣だった。鞘から抜き出したそれは間違いない剣である。

最初は農具の類かとも思ったが、鞘から抜ききったそれはどうみても剣にしか見えない。

たとえ剣でなかったとしても、人を殺傷するのには十分過ぎるほどの刃渡りを持つ刃物である。

俺の全身に緊張が走る。

刃物を向けられた経験など当然ない。ナイフはおろか、包丁を向けられた事さえ一度もないのだ。

青年が剣を構える。俺が止めようと声を掛けるよりも前に、青年がこちらに駆け出てきた。

俺はどうしようと必死で考える。その間にも青年はどんどん距離を

縮めてくる。

俺と青年の距離はもうあと数歩ほどになってしまっている。

俺はどうすることも出来ずに、左手を前に突き出し、右手で頭を守る体勢をとって目をつむる。

青年が剣が振り下ろしたのだろう。俺の耳に剣で風を斬る音が届く。

数秒経って恐る恐る目を開けてみると、青年は俺から数十歩離れた所で剣を構えていた。

風を斬る音は目の前で聞こえたので、剣を振り下ろした後で距離を取ったのだろう。

（斬られなくて良かった…）

そう安堵して右手を見ると、手首から先がなくなっていた。

しかし、しかばねはうごきだした。

どのくらい走っただろうか。

俺は青年から逃げるために、脇目もふらずに森の中に逃げ込んだのだ。

体が重いので、ほとんど引きずるような無様な走り方だった。スピードも普通に歩くよりも少し速いくらいだ。

だが休むことなく此处まで逃げてきた。あの場所から一度も休まずにだ。

いや、休むことが出来なかったと言ったほうが正確か。

時間にして三四時間だろうか。もしかしたらもっと長いかもしれないし、もっと短いかもしれない。

身を隠せそうな大きな樹洞を見付けた時は、安堵で倒れ込みそうになっってしまった。

逃げる途中で様々な生き物を見た。それこそ魔物と形容するに相応しい生き物たちだ。

身の丈が子供ほどしかない、醜い小人。

大人でも丸呑みにされてしまいそうな大きな犬。

棍棒を担いだ一つ目の巨人。

今まで一度も見たことのない化物達だ。青年に剣で斬られた時以上の恐怖で心が塗りつぶされる。

（だけど一番恐ろしいのは…）

改めて自分の左腕を確認するが、斬られた手首が元通りになってい

るはずもなく、そこには痛みを感じることもなく、血を流すこともない腕が変わらずあった。

（どうなってるんだよ…）

青年の言動が頭の中でよみがえる。

必死に否定しようとしても、数々の証拠が逃避を許さない。

俺はどうやら化物になってしまったらしい。

せめてグール並に

あの青年は俺を見て「グール」と言っていた。

グール。確か昔やったテレビゲームにそんな名前の敵モンスターが出てきた。

記憶が正しければ、人の死体を貪る動く死体だ。そこまで思い出して、俺はため息をついた。

（はあ…）

つまり俺は一度死んで、第二の人生、というより人生の延長戦をスタートしたわけだ。

食事云々の部分は気になるが、所詮ゲームで得た知識だし、現状腹は減ってない。ましてや人の死体を食べたいなんて微塵も思っていない。

しかしどうにも素直に喜ぶことができない。

延長戦とは言っても動く死体だ。

しかも周りの状況。少し足を延ばせば見たこともない化物が闊歩している。どう見ても日本じゃない。というより地球じゃない。

意味が分からない。何で俺はこんな世界に一人で彷徨ってるんだ。

セオリー通りなら俺は世界を救うために異世界に召喚された勇者のはずだが、なぜかグールだし。なぜか目覚めたのは何も無い森の中だし。

（考えても仕方ないか…）

答えの出ない自問に続けても意味がないと、俺は別のことを考える。不幸中の幸いと言っているのか、元の世界で俺の身を案じてくれる

身内はそう多くない。

仲の良い友達数人程度だ。

両親は既に他界しているし、俺の死、ではなく行方不明を心配してくれるような、できた親戚もない。

元の世界でやりたい事があったわけではないが、人並みに幸せな人生を送って、人並みに幸せな最期を迎えると勝手に思い込んでいた。

（ああ…もう人並みも叶わないんだな…）

そこでようやく実感する。グールになってしまった自分は、人並みの人生を願うことも許されないんだと。

青年の反応を見る限り、人と仲良く暮らしていく、なんてことも難しいだろう。

そう思うと目頭が熱くなって、自然と涙が頬を伝った。

あれからどれくらいの時間が経っただろうか。

もう外はすっかり暗くなって、夜の森を月が煌々と照らしている。

今夜の月は元の世界と同じように白く光っている。

（これだけ見ると元の世界と変わらないんだけどな…）

俺はよしっと思考を切り替える。今ので嘆くのは最後だ。

もう十二分に嘆いて逃避した。

今の自分にはどうせどうすることも出来ないのだから、もう開き直ってしまおう。

人並みの幸せが望めないなら、グール並みの幸せを掴めばいいじゃないか。

折角の延長戦だ。

今度は蘇っても悔いがないように生きようじゃないか。

せめてグール並に（後書き）

なぜあんな所に倒れていたのか。

なぜグールになっていたのか。

なぜこの世界に来てしまったのか。

とかはちゃんと理由があります。

今後書いていく予定なので楽しみに。

なにをすればいいのかわからない。

人生の延長戦を謳歌することに決めた俺だが、如何せんこの世界のこと何も分からない。

分かっているのは魔物と人間がいること。あとは人間が剣を精製出来るくらいの文明水準には達している、そのくらいだ。

よくあるRPGゲームでは、魔物が一斉に襲いかかってくるが、魔物共通の言語みたいなものが存在するんだろうか？

いやいや、ゲームと異世界に同じ法則を当てはめようとするのは大変危険だ。

「やあ」と気軽に話しかけて半殺しにされる可能性も十分あり得る。

(だけど、それじゃあどうするか…)

頭を抱えても一向に良いアイディアは浮かんでこない。

^{グール}同族を探すにしても、この世界に来てから、同族の影さえ見えない。闇雲に探しまわるしかないので、コレは最後の手段だ。

そんな訳でとりあえず他の魔物に話し掛けてみるしかなさそうだ。

グールと言っても仮にも魔物。生身の時よりは防御力は上がっているはずだ。

そうやって自分で自分を安心させて、さらに思考を継続する。

(話し掛けるのは…やっぱりアイツだよな。)

俺がアイツと言っているのは、この樹洞を発見するまでに見かけた数々の魔物の一種。
緑の小人のことだ。

見かけた中で一番小さいし、なにより弱そうだ。

そうと決まれば行動開始だ。

樹洞の中で休んだお陰か昼間よりも体が軽い。さらにグールの体は暗視が効くようだ。

一日歩き詰めだったにも関わらず、空腹も眠気も感じなし、考えようによつては良い体を手に入れたのかもしれない。

まあ元の体に戻りたいかと聞かれたら、ハイと即答しますけどね。

木々の間に身を隠しながら、慎重に進んでる内に魔物を見掛けない事に気が付く。

グールの体になって失念していたが、魔物も生物なら夜は寝るだろう。

夜行性の魔物も今のところ見掛けない。

コレは好都合だ。魔物がいなければ身を隠す必要がないので楽に進める。

道端で寝ている魔物がいらないことから考えても、普通の魔物は巣を作るようだ。

巣の位置を把握しておいて損はないだろう。

俺はそう結論付けてさらに森の中を進んでいく。

見付けた。あの緑のヤツの巣だ。

一番初めに見つけたのがヤツらの巣だったのは運がいい。

洞窟の入口近くに見張りをするように一匹の緑が立っていたから、見付けるのはそう難しくなかった。

さてどうするか。巣穴は発見したから、朝になるまで待つて、散り

散りになった所で話し掛けるのがいいか、それとも今すぐ話し掛けるか。

グールの体は眠ることができない。

夜が明けるまでにはまだ数時間あるだろう。朝まで待つのは精神的に厳しい。

それに散り散りになる前に発見されて囲まれたら最悪だ。他のヤツらが寝ている隙に接触したほうが良いかもしれない。

そういう訳で俺はさっそく見張りの緑に接触してみることにした。

刺激しないようにゆっくりと近づく。

緑との距離が十数歩ほどになってようやく相手もこちらの存在に気付いた。

そこで俺は声を掛けてみることにする。

「おおおおお」

相変わらず、口から出るのは「おおおお」だが、もし相手に意味が伝わっているなら、何かしらの反応が返ってくるはずだ。
ちなみに俺が言った内容は「こんばんは」だ。

（お。向かってきた。）

俺の声に反応してか、緑が近づいてきた。

片手を挙げて、今にも「やあ」と返事を返してきそうだ。

さらに数歩。緑はとうとう俺の目の前までやってきた。

俺がすっかり言葉が通じたと思って次に何と話しかけようかと迷っている、緑が挙げていた片手を勢い良く振り下ろして俺の頭を殴

りつけた。

殴られた衝撃で一瞬視界が暗転する。その間にも緑は俺を殴り続けている。どうやら言葉は通じてなかったようだ、と痛覚の無い体で冷静に考える。

とりあえず殴るのを止めさせなければ。いくら痛覚がないとはいえ、この体では傷の回復は見込めない。そう思い、一番手っ取り早い方法で殴るのを止めさせることにする。つまり殴り返すのだ。殺すつもりはないが、対象が殴り返してくると分かれば、相手も少しは慎重になるだろう。距離をとってくれば万々歳。その間に逃げるなりなんなりすればいい。

俺は少しの力で緑を殴り返してみる。緑は殴るのを止めない。俺は力を強めて緑を殴り返してみる。緑は殴るのを止めない。俺は渾身の力を振り絞って緑を殴り返してみる。

「ギャアアー――！」

緑が鶏の首を締めて振り回したかのような奇声を発して地面に倒れ込んだ。

俺は恐る恐る倒れた緑を覗き込んでみる。

すると何の前触れもなく、頭の中に「ゴブリン」という単語が浮かび上がった。

いきなりこんな単語が思い浮かんだ理由はわからないが、もしかするとこの緑はゴブリンと言う魔物なのかもしれない。

そんな事を呑気に考えていると、巣穴の方からゴブリン達の奇声が聞こえてきた。

「ギァアアー！」
「ギァアアー！」

さっきの奇声を聞いて、巣穴の中にいたゴブリン達が目覚めたようだ。

これはまずいと俺は逃走を謀る。

だが悲しきかなグール。先に走りだしたにも関わらず、巣穴から這い出してきたゴブリン達にいと簡単に追いつかれ、今は殴られながらも必死に逃亡中だ。

だいたい俺が全力で走ってゴブリンたちの歩く速度よりも少し速いくらいだった。

巣穴から出てきたゴブリンは計四匹。どれも見張りをしていたゴブリンよりもひと回り小さい。

足を止めて応戦しようかとも考えたが、後続のゴブリンいなくても限らない。

幸いコイツらは小さいので、殴られてもダメージはほぼゼロだ。たぶん。痛覚がないので、実はよくわからないが。

ただ、見る限りでは殴るというより、むしろ叩くだ。この程度の攻撃なら身体がどうこうなることはないだろう。

それよりも早く巣穴から離れなければ。大きな個体が追いかけて来ないとも限らない。

しばらく走ると木々が急に途絶えて草原に出た。草原と言うよりむしろ湿原か。

所々に水溜まりのような沼があり、足元が見えないくらい背の低い草が所狭しと生えている。

ゴブリン達は俺が森を出ると、追跡を諦めて帰っていった。いやにあっさりしているが、俺としては有難い。

異種族に言葉が通じないことも分かったし、次は同族探しだ。

せっかく新しい場所に出たんだ、森に戻っても何かあるわけじゃないし、当面はこの湿原を進むことにしよう。

俺は今後の方針をそう定めて湿原を歩き出す。

数日前の俺ならここで座り込んでいるだろう。こういう時に疲れない体は本当に便利だ。

ルガリア大湿原

あれから数時間、太陽は既に俺の真上だ。

天気は雲ひとつない晴れ模様。周りの野草の様子から、側面から風が吹いているのが分かる。

感じる事が出来ればさぞ心地よい風だろう。

何も感じる事のない体を恨めしく思いながら、頭の中で現在判明している情報を整理する。

森を出てから此処までに、大きく分けて三つの事実が判明した。

まず一つ目。

この体は太陽の光に弱いということだ。

太陽が昇るに連れて体はどんどん重くなり、太陽が登り切った今の気分を一言で表すなら「最悪」の漢字二文字だ。

昨日は路を辿ることに必死だった分まだ気が紛れたが、色々な事に気を配るだけの余裕が今の俺にはある。

まるで体に金属の重りを付けたようだ。太陽をここまで憎く感じる日が来るなんて、数日前の俺は想像もしなかっただろう。

そして二つ目。

この体どうやら魔物に襲われならしい。魔物達はその嗅覚か、或いは野生の感で俺の死臭を嗅ぎ分けてるのかもしれない。

俺も最初のうちは魔物を見かける度に死んだフリをしていたが、どうやら相手も俺に気付いていながら襲ってこないふしがある。

遠くに犬のような魔物を発見して観察していた時など、観察に夢中になって、背後から同種の魔物の接近を許し、気付いた時に驚いて思わず声を上げてしまった。しかし魔物はこちらを一瞥しただけで、

何事もなかったように通り過ぎていったのだ。

この出来事でこの事実を確信した俺は、魔物もつと近くで観察してみることにした。

近くで見ると、大型の魔物の毛は普通のそれとは違い針の集まりである事が分かった。眼も真つ赤に充血したようで、その凶暴性を顕著に表していた。

さらに調子に乗って、腕を延ばせば触れることが出来る距離まで近づいたが襲われることはなかった。

そしてとうとう乗りに乗った俺は魔物に触ってみた。

結果はこの通り。体当たりをかまされて、左腕の骨が折れました。痛覚がないので体当たりは痛くなかったが、吹き飛ばされた後に左手を確認した時、腕が曲がるはずのない方向に曲がってるのを見て思わず泣きそうになってしまった。俺の体がどんどんボロボロになっていく…主に左側を中心に…。

ハイ、反省します。猛省です。戒めとして左腕はそのままにしています。

本当は元に戻そうとして取り返しをつかないことになることが怖かっただけです。

三つ目は此処がルガリア大湿原という名の湿原だということ。

これは湿原を進んでいる途中、人の死体を発見した時に判明した事実だ。

死体はあちこち食い荒らされていて、見るも無残な状態となっていたが、目的の物は無事だった。

荷物は魔物に荒らされた形跡が見られたが、概ね良好。きっと食料だけ持ち去ったのだろう。

中身を漁って使えそうなものを選別する。

役立ちそうな物は短剣、地図、マント、コンパスくらいだったが、今の俺にこれだけでも有難い。特にコンパスと地図はこれかの旅に必須と言ってもいいくらいだ。

地図を確認してみたところ、全く知らない言語で地名などが書かれていが、なぜか俺はその言語を理解することができた。

思い返せば異世界で、見知らぬ青年が日本語を喋るのもおかしい話だ。もしかしたらあの青年も、異なる言語を使用していたのかもしれない。

この世界に来てから不可解な事ばかりだが、いい加減に不可解な事にも馴れた。考えても仕方ないことは仕方ないのだ。

俺はこの世界に来て、切り替えが早くなったことを自覚しながら地図に目を落とす。

地図によると此処は「ルガリア大湿原」と言うようだ。

さらには湿原の丁度中央に「ルガリアダンジョン」というダンジョンも存在するらしい。

この辺りにも同族のグールはいないようだし、ダンジョンに行ってみるのも悪くない選択だ。

湿原の西側にある「サンハイルの古城」というのも気になるが、距離から考えて、先にダンジョンに向かうのが妥当だろう。

ちなみに俺が目覚めた森は「シクラセ森」という名前のだった。

そんなこんなで俺はダンジョンに行くことに決めた。

そんなに大きな湿原でもないようだし、地図もある。

今日中にはダンジョンに着けるだろう。

俺はダンジョンという響きに胸の高鳴りを抑えられないまま、決して胸が高鳴ることのない体で湿原の中央に向けて進路をとる。目指すは「ルガリアダンジョン」。人生で初めてのダンジョン体験だ。

ようす、ここはルガリアダンジョンです。

地平線に日が沈む頃。俺はとうとうルガリアダンジョンに到着した。地図を見付けた地点から、ひたすら真っ直ぐ歩いてきたが、どうやら無事に到着出来たようだ。

地図によるとこの湿原はほとんど円形で、真っ直ぐ歩けば何処からでもダンジョンに到達できるのが有難かった。

ルガリアダンジョンの入り口は、周りの湿原より少し小高くなった丘の上にあり、大きな平たい岩が二枚組み合わさって出来ていた。遠目からでよく分らないが、どうやらこの岩の隙間から地下にダンジョンが続くようだ。

自分の想像していたダンジョンとは似ても似つかないその外観に、少し拍子抜けしてしまう。

これではただの洞窟だ。

俺が想像していたのは、古代遺跡のような荘厳な建築物だった。

（まあそんな仰々しいものがこんな辺鄙な所に建っているはずもないしな。）

少し気持ちが落ち込んだが、気にせずに進み続ける。

ダンジョンに近づくに連れて、小さな看板が立っているのが見えてきた。

地面に挿した角材に、文字が書かれた板が打ち付けられているだけのみすばらしい看板だ。

板には「ルガリアダンジョン」とだけ書いてある。

もう少し何か書いてあってもいいだろうとも思ったが、よく考えれ

ばこんな湿原の真ん中に、ダンジョン以外の目的で訪れる人間もないだろう。

（此処がルガリアダンジョンだという確証も得られたし、それで良しとするか。）

そこでふと今まで自分が歩いてきた方向に目を向ける。

そこには夕日に照らしだされた湿原が、視界一杯に広がっていた。夕焼けをバックに世界は紅に染まり、所々に点在している沼が太陽の光を受けてキラキラと輝いている。周りよりも少し小高い、この丘の上だからこそ見える景色だ。

絶景と言っても過言ではないであろうその光景に、俺は思わず息を呑む。

この景色を見られただけでも此処まで来た価値がある。これで同族を見つけられれば百二十点満点だ。
俺はつきつきとした気持ちのまま、意気揚々とダンジョンの中に足を踏み入れる。

ダンジョンの中にコレといって変わったものはなく、「ただの洞窟」という感想もあながち間違っていたわけではないようだ。

思っていたよりも広々とした洞窟が先に続いているが、予想と違うのはそのくらいだ。

進むに連れて狭くなるといったこともないようだし、のんびり歩き進める事にする。

日の光がどんどん弱くなっていくが、グールの体である俺にそんな事は関係ない。むしろ体が軽くなる。

しばらく進み続けると前方に人影を発見した。

人影は一人。こちらに背を向けて突っ立っている。

ようやく同族を見付けたと声を掛けようとして、あることに気付く。そう、ここはダンジョンなのだ。ダンジョンと言えば、お宝、トラップ、魔物、そして冒険者。

ここまでの道のりで、生きている人間を一人も見かける事がなかった。たので失念していた。

ダンジョンなんだから冒険者の一人二人いてもおかしくないのだ。

（どうするか…）

いきなり声を掛けるのは危険過ぎる。

このノロマな体では奮戦は望めないし、いくら防御力が上がったといっても、剣の前には歯が立たないのは身を以て経験済みだ。

しかし気になることが一点。相手はこの暗闇で何をしているかということだ。

人の目ではこの暗闇の中で物を見るなんてことは不可能だ。

これを考慮すれば相手が人ではないのは明白なのだが、相手が異種族だった場合も考えなければならない。

ゴブリン程度ならよいが、強い魔物が威嚇と勘違いして襲ってきたら一溜まりもない。

（人形だからゲールだとは思うが…しばらく様子を見てみるか。）

現状自分がとれる最善の策は観察だと判断し、俺は近くの岩陰に身を隠した。

相手は俺に気付くことなく、未だに突っ立ったままだ。

観察を始めてから大体十分ほどだろうか。

時々大きく体が揺れるのは確認できたが、その他には全く動きを見せない。

一体何をしているんだ。

観察を始めてから、俺の体内時計ではもうすぐ四十分だ。

退屈な時間は長く感じるというが、時間感覚には自信がある。誤差はプラスマイナス五から十分で収まっているはずだ。

しかし俺は生来気が長い性質ではない。

さすがに時々振るえるだけの物体を四十分間見続けるのには無理がある。

とうとう我慢できなくなり、俺は対象に声を掛けることにする。

様子を見る限り凶暴な魔物ではないだろう。

なによりもう我慢するのは限界だ。

「おおおお」

対象の体が大きく揺れて、ゆっくりとこちらを振り向く。

「おおおお」

その声を聞いて俺は安堵のため息を漏らす。

どうやら相手もグールだったようだ。

しかし良い事ばかりではない。

俺の期待はあっさりと裏切られ、今度は落胆のため息が口から漏れ出す。

そう、俺は相手の言葉を理解できなかったのだ。

もう一度話し掛けても結果は同じ。返事は返ってくるし、襲われることもないが、相手が何を伝えたいのかまるで分からない。

（駄目だったか…）

意思の疎通が出来ない原因として考えられる可能性は二つ。

一つはこの魔物がグールではないというもの。

二つ目はグールは同種族とコミュニケーションが出来ないというものの。

できるだけ前者であることを願いつつ、声を掛けた魔物に近づいていく観察してみることにする。

その魔物はどこからどう見てもグールだった。

遠くからでは分からなかったが、土気色の肌に所々肉が腐り落ちて白い骨が覗いている身体。

そう、どこからどう見てもグールなのだ。これをグールと言わずして何をグールと言うのか。

まさにグールを体現したかのような魔物だ。

（いや、しかし…）

そう、しかしだ。

人は外見ではなく内面であると言うし。そもそもここは異世界だ。俺に分からない事も多いだろう。

そうだ、この魔物がグールではない可能性も十分にあり得る。

などと自分に言い訳をしつつ、その場を急いで後にする。

後にはグールがぼつんと一人残された。

随分奥深くまで進んできたと思う。

一般的なダンジョンの大きさは知らないが、そろそろ最深部が見えてきてもいい頃ではないだろうか。

あれから何度もグールらしき魔物に遭遇した。
身体が半分以上腐り落ちているヤツ、目玉が片方ないヤツ、その他
色々だ。

最初のうちは会う度に話し掛けていたが、返ってくる呻き声はどれも同じで理解することができない。

俺は途中から自然と話し掛けるのを止めていた。

（もしかしてこの世界では、俺は誰にも言葉を伝えることが出来ないんじゃないか？）

ふと不吉な想像が頭をよぎる。

（いかにいかに、ネガティブになってどうする！）

頭を振るって不吉な想像を追い出す。

延長戦を楽しむと決めたのだ、言葉が伝わらないくらいどうした。

人生の楽しみ方なんて千差万別だ。今日見たような絶景を探しまわる、そんな人生だって悪くないじゃないか。

前向きに物事を考えよう。

オマケの人生であれこれ悩んでも仕方ない。

そうこう考えているうちに洞窟の最深部が見えてきた。

最深部は今までの道のりからは考えられないくらい広く、天井までの高さは目測で20m近くある。

入り口付近から見渡した限りでは、ダンジョン定番の宝物はなさそうだ。

ただ宝の代わりと言わんばかりに白骨死体が数体転がっている。

冒険者のものなのだろうか。そばにはボロボロになった剣と一緒に転がっている。

（これでドラゴンでも居たら雰囲気であるんだけどな…）

中央まで進んでもう一度周りを確認する。

しかし目に映るのは岩の壁と白骨死体ばかり。

またもや落胆のため息が漏れそうになるが、そこであるものを発見する。

入り口のすぐ横の岩の裂け目。もたれかかるように死んでいるマン
ト一丁の死体と、その死体の持ち物であると思われる大きな肩掛け
カバンがあるのを発見したのだ。

白骨死体ばかりだと思ったが、比較的新しい死体もあるようだ。

俺はすぐに近づいて、カバンの中身を物色し始める。

（こ、これは…）

荷物の上には綺麗に畳まれた服があった。

もう一度死体を確認する。死体は依然マント一丁のままだ。

手元を確認する。そこには綺麗に畳まれた衣服。

どうやらこの人は生前そういう趣味があったようだ。

（いくらなんでもダンジョンの中でしなくても…）

深く考えるのは止めよう。戻ってこれなくなる。

荷物を検分した結果、この死体は生前「ロナルド・ウィークリー」
という名前だったらしいことが分かった。

それよりも重要なのは名前が書いてあった日誌だ。

日誌の表紙には手書きでこうつづられていた。

ようこそ、ここはルガリアダンジョンです。(後書き)

次回、知られざるグールの生態が明らかに！

各話の字数にむらがり過ぎる…

グール生態研究日誌（前書き）

前話、若干の手直しを加えました。

グール生態研究日誌

「グールの生態研究も一段落したので、ここで今までに判明した事実を纏めてみたいと思う。」

今までに数々の魔物を研究してきたが、グールという魔物は知れば知るほどに奥が深い。非常に興味深い魔物だ。

他の学者と同じ様に「たかがグール如き」と軽んじている時期もあったが、それも今では思い出たくない過去だ。

低ランクの魔物だからといって甘く見ていた自分が恥ずかしい。

一般に知られているように、グールという魔物は人間の死体に魔力が少しずつ宿って動き出したものだ。

グールの発生条件は以下の一点。

空気中の魔力濃度が高いこと。これのみだ。

空気中の魔力が一定濃度に保たれるには洞窟や密室などの閉ざされた空間でなければならぬので、この条件を二点目としてもいいかもしれない。

これは私の憶測だが、全く魔力のコントロールが出来ない、尚且つある一定以上の魔力を持った人間が死ねば、その内在魔力が身体の外に流れ出し、一時的にこの条件が満たされてグールが発生すると思われる。自分の魔力なので、体にも馴染みやすいはずだ。

現実的な問題として、人は成長過程で自然と体内魔力のコントロールを身に着けるもので、そんな人間は存在しないが、或いは生まれてから十数年間大気中の魔力を断った状態で生活すれば、体内魔力の暴発の心配も無いので、そういう人間に成長するかもしれない。

しかし魔力を遮断する道具は高価だ。加えて被検者にも死ぬまで不

自由な生活を強いることになる。

道徳的な観点から実験は不可能だろうし、こんな憶測を実証するためにそんな事をするつもりもない。

いかんいかん話が逸れてしまった。

話を戻そう。

このグールは、なんと空気中から魔力吸収して生き延びていのだ。彼らは他のアンデット系の魔物とは違い、他の生き物を殺めてその肉を喰らい魔力を取り込む、といったことを行わない。

私がこの性質に気付いたのは、詳細な観察をしようとグールを捕獲し、研究室に連れ帰った事が原因だ。

なんとそのグールは連れ帰ってからわずか二週間で腐り果ててしまったのだ。

一般的なグールが十数年をかけて腐り果てる事を考えれば、これは驚くべき早さなのだ。

さっそく私はもう一度グールを捕獲し、今度は空気中の魔力濃度をダンジョン内と同じになるよう保って観察を行った。

するとどうだろうか。グールは二週間を経過しても腐ることはなく、ひと月経過しても、ひと半月経過しても腐り果てるどころか、捕獲した時と変わらぬ姿を保っているではないか。

残念ながらそれ以上の観察続行は、私の魔力が限界を迎えてしまったので出来なかったが（ちなみにこのグールも魔力の供給を絶つと一週間で腐り果てた。）、しかしこれでグールの特異性が証明されたわけである。

自分で実証してなんだが、これには私も驚きを隠せなかった。媒介を用いて他者の魔力を吸収する魔物は珍しくないが、空気中から媒介もなしに吸収など聞いたことがない。

数多の魔物を研究してき私だ。

この特異な性質は、グールの正式な形態変化先であると考えられているボーンナイト（グールの身体が数十年の時を経て全て腐り落ちるとボーンナイトとなる。）には受け継がれていない。ボーンナイトの形態変化先にもだ。

このことから、ボーンナイトはグールの正式な形態変化先などではなく、むしろ亜種的な位置付けだというのが私の推論である。

知られているように、グールの形態変化先はボーンナイト以外確認されていない。

しかし、これはグールの奇抜な行動様式が起因しているのではないだろうか。

彼らは能動的な行動を殆どとらない。

日がな一日突っ立っているだけで、眠りもしないし、食事もしない。時々思い出したかのように移動するが、これが行動と呼べるのか甚だ疑問である。

唯一動きを見せるのは攻撃を受けたときだけだが、これにしたって動きは鈍く、同族が目の前でやられても自分が攻撃されるまで反応は一切なしだ。

このように、グールはまさに「生きる屍」の体現である。

発生する過程で脳が腐り、本能と呼べるものさえ殆ど残っていないのであろう。

そんな彼らが他者を殺めて経験値を溜め、形態変化するなどありえない。

だからグールの正式な形態変化先は今までに一体も確認できていないのではないか。

この推論が正しければ大発見である事はまず間違いない。

だが例外的に本能が残っているグールが都合よく現れる筈もなく、私の推論の信憑性を実証するのは困難を極めるだろう。

死人に魔力を送り込んで（死体は病死した若者のものを使用した。もちろん本人には生前きちんと許可を取ってあった。）、人為的にグールを発生させる実験も行ってみたが、魔力が身体に馴染まず、自然発生するものより早くグール化させることは不可能だと分かった。この推論の証明は今後の課題だ。

長々と書いてきたが、今現在分かっているのはこのくらいだ。

この日誌を書き終えたらルガリアダンジョンに向かってみたいと思う。

ルガリアダンジョンは何もない辺境のダンジョンとして有名だが、数年前に宝が隠されているという噂が流れて結構な数の冒険者が争奪戦をしたようだ。

しかし噂はデタラメで、後には殺し合いを繰り広げた冒険者の死体だけが残ри、今ではそれがグール化しているらしい。

これが本当なら朗報だ。

運が良いことに私は隠者のマントを持っている。あの辺りの魔物のランクなら、道中襲われることもないだろう。

ダンジョンから帰ってきたら、今までの研究結果を纏めて論文を書くと思う。

グールという魔物は本当に奥が深い。他の研究者達が私の論文を読んでその事に気付き、グール研究がもっと盛んになってくれれば幸いだ。

」

グール生態研究日誌（後書き）

おや…最後のページに何か書いてある…

ポイントがあらわれた！（前書き）

私の文章が凄く読みづらい事に今更気付く。
私は今までの文章に改行を増やしてみた。
あまりの変化のなさに落胆した。

ボーンナイトがあらわれた！

『ボーンナイトに斬りつけられた。』

グールは同族同士でコミュニケーションをとるといったことがない。能動的に動くことがないのだから当たり前だ。

そこで私は自分がグールに化けることで、どうにか反応を引き出せないか試してみた。

私を嗤う学者もいるが、私は新たな発見のためならなんだって試す。これが恥ずかしい行為だとは微塵も思わない。

グールの唸り声を真似。仕草を真似。死体を真似るために服も脱いだ。

どうせ誰も見ていないのだから大丈夫だと。そう考えていたのだ。

だが甘かった。

隠者のマントを脱いだ私の魔力をあざとく感じ取り、最深部からボーンナイトが這い出して来たのだ。

最深部までには距離があるから大丈夫だと高を括っていた。

ここまで魔物に気を付ける必要がなかったので油断していたのかもしれない。それもこれも隠者のマントのお陰だというのに。

私は背後から接近するボーンナイトに気付かずに初撃を足に受けてしまった。

拙い剣術でなんとか撃退することには成功したが、これでは一人でダンジョンを脱出して帰還するなど到底出来ないだろう。

今は隠者のマントでボーンナイトの目を欺いている。

傷薬は持つて来たが、これほどの傷には気休め程度にしかないだろう。出血は依然止まる気配をみせない。

いつもはもつと上等な薬を持つてきているが、今回はかさばるからと置いてきた。

グールを軽んじる研究者を批判してきたが、私もたかがグール観察だと心の奥底では軽んじていたのかもしれない。皮肉な話だ。

グール研究を完遂出来なかったことは少し残念だが、研究者として死ねるのだ。そこに未練はない。

ただ家族のことが気にかかる。それだけが心残りだ。

もしこの日誌を見付けた者がいれば、家族に私の死を伝えてほしい。この日誌を見せれば信じてくれるはずだ。

家族は王都に住んでいる。私の装備は好きに使ってくれて構わない。ペンを握る手に力が入らなくなってきた。

すまないキヤスカ、それにメアリー。

キヤスカ。心配ばかりかけてすまなかった。

一緒に魔物研究をするって約束、守れそうにない。ゴメンな。

メアリー。すまない。私はもう助からないだろう。

キヤスカや家の事は頼んだ。君には最後まで苦勞ばかりかける。

二人と過ごした日々は、私の人生で最高のものだった。ありがとう。二人とも愛してる。

神よ、どうかこの日誌を見付けた者にご加護を。そしてこの日誌が無事に家族の下に届かんことを。』

日誌はこう締め括られていた。

これで俺の今後の方針は決定した。いや、決定してしまった。こんなものを見せられて無視出来るほど俺は非情じゃない。

グールではこの頼みをやり遂げることは困難を極めるだろう。しかし諦めるわけにはいかない。

この日誌によれば、俺はロナルドさんが捜し求めたグールらしいではないか。まさに運命だ。

立場に甘えることは許されない。

（なんとしてもこの日誌を王都に居るロナルドさんの家族に届けよう。）

俺はそう決意を新たにする。

さて、そうと決まれば早速行動開始だ。

ロナルドさんも装備を貰って行ってもいいと言っていたし、有り難く頂戴しよう。

（まずはマントを、）

俺は湿原で拾ったマントを脱ぎ捨てて、ロナルドさんから隠者のマントを慎重に脱がして装備する。

着心地は普通のマントと変わらない。感覚がないこの体では、着心地と言ってもたかが知れるが。

荷物は先程中身を確認したのでそのまま肩に掛ける。

この身体に傷薬が効くとは思えないので持っていくかどうか迷ったが、結局持っていくことにした。

何があるかわからないしな。

今後どうするか考える。

王都に日誌を届けるのは決定事項だが、少し気になることがある。それは主に日誌の内容についてだ。

日誌にはグールがダンジョン外では二週間で腐り果てると書いてあった。

俺は他のグールと少し違うようだが、それでも無視できる問題ではない。

日誌によると他のアンデット系の魔物は他の生き物を食べて魔力を吸収しているらしい。

グールが魔力を糧としているのは日誌から明らかだが、問題はこの「他の生き物」という文面だ。

この他の生き物には十中八九人間が含まれているだろう。しかし動物は含まれるのか。他の魔物はどうかなのか。

いくらグールになったとはいえ、人殺しになる覚悟を決めたわけではない。

(どうするか…)

動物や魔物に関しては生きるためだ、覚悟を決めるしかないだろう。とりあえず外に出て色々試してみよう。

そう決めて歩き出す。

最深部から出た所で、ふとあることを思い出す。

(そういえばボーンナイトは…?)

そう、ロナルドさんを襲った憎きボーンナイトがいないのだ。

此処までの道のりに白骨らしきものは一体も見かけなかった。白骨があったのはこの最深部のみだ。

日誌の文面からしてもボーンナイトを完全に倒しきったわけではな

いように思える。

俺はUターンをして入り口に一番近い白骨死体に近づく。

（ただの人骨だよな？）

などと考えながら骨の一つを手取る。
すると、

カラカラカラカラ

バラバラだった骨が集まりだした。

突然の事に驚いて、思わず骨を取り落とす。

その骨もひとりでに動いてその集まりに加わる。

骨はみるみる集まって、あっという間に人の形を成してしまった。

形態変化

（これがボーンナイトか…）

相手を刺激しないように距離をとりながら、そんなことを考える。
ボーンナイトは近くに転がっていた剣を拾い上げた。

（気付いてないのか…？）

剣を拾ったボーンナイトは、キョロキョロと周りを見回している。
こちらには全く気を配っていない。

隠者のマントの効果か、或いは同じアンデット系の魔物だからか、
理由はハッキリしないが僥倖だ。

俺は腰の短剣を抜いて、ゆっくりとボーンナイトの背後に回りこむ。

（恨みはないが、ロナルドさんの仇だ。）

ゆっくりとボーンナイトの背中に近づく。

手を伸ばせば届く距離まで近づいたが、相手はこちらの存在に気付く様子はない。

片手で短剣を構える。

狙いは頭。頭蓋骨にしよう。

一撃で仕留めなければ反撃される恐れがある。

ゆっくりと振り上げた短剣を思い切りボーンナイトの頭部に振り下ろす。

短剣は頭蓋骨に突き刺さり、そのまま俺の腕がボーンナイトの頭を

叩き落とした。

地面に勢い良く叩きつけられた頭骨は、その衝撃で大きく欠け、それと同時にボーンナイトの身体も支えを失ったようにバラバラに崩れ去った。

後にはさっきと同じように骨が散らばっているだけだ。

狙いとは少し違うが、どうやら一撃で倒すことに成功したらしい。そんな事を考えていると胸の奥が熱くなる。

この体になって、ダルさ以外の感覚を感じたのはこれが初めてだ。驚いている俺の頭の中。立て続けに二つの単語が浮かび上がる。

「ボーンナイト」

「ハイグール」

胸の熱は次第に身体全体に広がっていく。

身体が熱い。

燃えるようだ。

久しぶりの感覚を懐かしむ余裕などない。

（なんだこの熱は…？）

熱はしばらくすると次第におさまっていった。

熱が完全にひいてから自分の身体に異常がないか確認してみる。するとどうだろうか、土気色の肌が白く変化してゐるではないか。

これなら少し色白な人で十分通る。

自分に何が起きたのか分からないが、思い当たる現象が一つ。形態変化だ。

頭の中に言葉が浮き出す現象はこれが初めてではない。

確かゴブリンと戦った時も頭の中に言葉が浮きだしたはずだ。

（生き物を殺すと頭の中に相手の名前が浮かぶのか？）

ということは今回、「ボーンナイト」を倒して「ハイグール」に形態変化したということか。

日誌には経験値がどうか書いてあったから、形態変化はまだ先になると思っていたが、期せずしてロナルドさんの推論が正しかった事が証明された訳だ。

（ロナルドさん、やっぱりあなたは正しかった！）

ロナルドさんの無念を晴らすことが出来たお陰か、心なしか身体が軽い。

いや、普通に軽い。

試してみると普通の人間のように走れるでないか。

（おお！おおっと危ない。）

嬉しさのあまり走り回って転びそうになる。

どうやらハイグールになって運動能力が大幅に上がっているようだ。

「おおおおおおおお！」

喜びを隠せずに叫び声を上げる。

相変わらず「お」以外を発音することは出来ないが、気分は全く落ち込まない。

自分にあと何回の形態変化が残されているのかは分からない。

だがこのまま形態変化を続けていくことが出来れば、いつか言葉を取り戻すことも出来るかもしれない。

灰色だったグール人生に一抹の希望を見出せた。

気持ちの高揚と形態変化の効果が相まって、まるで体が羽のようだ。

そのあと他に転がっている白骨死体も調べてみたが、ボーンナイトは最初の一体だけだったようだ。

ダンジョンの外はもう東の空が白んできている。随分と長い間潜っていたようだ。

俺はそこで後ろを振り返ってロナルドさんに黙祷を捧げる。

（必ず日誌を王都に届ける！）

心のなかで呟いて歩き出す。

目指すは王都。

俺の長い旅が始まることになる。

形態変化（後書き）

（カルシウム足りてないぜ…？）

俺は謎の決め台詞を残してその場を後にした。

この文章入れたかった。無理でしたけど。

けものために、いのりましょう。（前書き）

ゴブリンは基本この世界の魔物で一番弱いです。

繁殖力だけが取り柄みたいな魔物です。

武器を持っていないければ、成人前の人間でも十分勝てます。

平均的な体格の大人の男性が、思い切り蹴りを入れれば確実に絶命します。

主人公の場合は遠慮のないグールパンチと当たり所が悪かったのが相まって簡単に倒せました。

主人公が簡単にゴブリンを倒したのに違和感を覚える人がいるかもしれないので、一応補足。

けもののために、いのりましょう。

ダンジョンを出た俺は、湿原を西に進んでいた。

湿原を中心とした地図には街の姿はない。

そこで俺は湿原の西、「サンハイルの古城」に進路をとることに決めたのだ。

古城とは言っても立派な城だ。人がいる可能性は高い。

廃城になっていたとしても、この世界の事が何か分かる手掛かりがあるかもしれない。

古城に行くには、湿原を囲む森を突っ切る必要があるが、今の俺なら襲われる心配もない。隠者のマントもある。

形態変化のお陰で、今の俺の肌はグールとは思えないほどの血色を取り戻している。

人間としてはまだまだ白いが、それでも病的な白さでなんとか通るだろう。

喋れないのは多少不安だ。しかしそれも変わり者でなんとか通そうと思う。

今の俺を見てグールだと疑う輩もいないだろう。

心配があるとすれば、それは食事について。そう、魔力摂取だ。

森に入ったらまずは動物を探してみようと思う。

動物から魔力摂取が出来なければ、それはその時考えようと思う。あまり考えたくはないが。

森の中には驚くほど多くの動物がいた。

数日前に彷徨ったときには動物の姿など全く見かけなかったのに、今は沢山の動物を見かける。

どうやら隠者のマントが俺の気配を隠してくれているらしい。
その証拠に、隠者のマントを脱ぐと、途端に動物の姿を見かけなくなる。

俺は改めてロナルドさんに感謝する。

このマントがなかったら、俺は一人で動物を捕まえるどころか見付けることさえ出来なかっただろう。

動物捕獲は難航していた。

いくらマントが気配を隠してくれるとはいえ、俺の姿まで隠してくれるわけではないのだ。

俺の前に姿を現した動物も、俺が近づく素振りを見せるとすぐに走り去ってしまう。

ハイグルになって身体能力が向上しているが、それでも普通の人間並だ。

なんの技術も経験もない俺が、森の中で野生動物を追い掛け回して捕獲するのは困難を極めた。

何度目かの追跡に失敗して、次の獲物を探しながら歩いていると、草むらの中から蛇が現れた。

普段の俺なら驚きで一瞬固まってしまうかもしれないが、今の俺は生きること必死だ。

俺はその一瞬で獲物に近づき、すかさず蛇を捕まえた。

首を抑えて噛み付かれないようにする。

このまま首を斬り落したいが、今の俺には生憎と左手がない。

足を上手く使って蛇の頭を抑えつけ、そのまま右手で短剣を抜いて蛇の首に突き立てる。

短剣は蛇の首を綺麗に切断して、そのまま地面に突き刺さる。

刃物の扱いとしては下の下だが、そんな事を気にしている余裕は今の俺にはない。

こうして俺は初めて獲物を獲得することに成功したのだ。

はじめは蛇を捌くことも考えたが、試してすぐに断念する。素人の俺が片手で捌くなど不可能だった。

（こうなると丸かじりするしかないか…）

火をおこすことも出来ないので、丸かじりをする覚悟を決める。

食べ終わると、体の中が熱くなってくる。形態変化したときと同じだ。

しかし熱は体全体に広がることはなく、胸を少し温めるだけにとどまった。

きっとこれが他者の魔力を取り込むということなのだろう。

蛇の頭を地面に埋め、片手だけで合掌する。

糧になった蛇への感謝の気持ち、そして同時に申し訳ないという気持ちも湧いてくる。

食事をして申し訳ないと思ったのは初めてだ。

元の世界では、決して味わうことがなかったであろう感情だ。

そんな感情を胸に抱きながら、俺は再び歩きだす。

もう木々の間から古城のものらしき外壁がチラホラと見え始めている。

目的地はすぐそこだ。

サンハイルの古城

遠くからでは木が邪魔で見えなかったが、どうやら古城は山の中腹、切り立った崖の上に建てられているようだ。

このまま直進しても辿り着けそうにない。

俺は古城を見失わないように、大きく迂回して進むことにする。

進路を変更してからしばらく進むと、古城に続いていると思われる小さな小道を見付けた。

整備はされてないようで、雑草があちこちに生えてはいが、しかし路があるというだけで気持ちが少し楽になる。

このままこの小道を辿って行こう。

それから一時間ほどで古城に到着した。

道中坂道が続いていたが、疲れを感じることもない俺は、ペースを落とすことなくここまで歩いてきた。

途中で今の体なら走り続けることも可能だと気付くが、人に見られると厄介なことになりそうなので自重しておいた。

石造りの古城は、なんとも言えない荘厳さが漂っている。

童話に語られる巨大な城ではないが、その威風堂々とした佇まいは圧巻の一言だ。

しかし城に活気はなく、人の気配を感じない。城門も開け放たれている。

城門から中に入る。

だがここにも人の気配はなく、石が敷き詰められた中庭が寂しく広

がつているだけだ。

やはりこの城は既に廃城つとなっているようだ。

俺はこの世界に関する知識を得るために、古城の内部を探索することにする。

（本の一冊でも残ってればいいけど…）

重たそうな玄関扉は、力を加えるとさしたる抵抗もみせずになりど開く。

正面ホールには少女が一人と大きな犬が一匹。こちらをじつと見つめていた。

「に、人間ではないですか！という事です！？」

驚いた声を上げたのは少女だ。

腰まで伸ばしたブロンドに、顔も可愛らしく整っていて、黒いドレスを身に付けているその姿は、おとぎ話の一面を切り取ってきたかのようだ。

「落ち着いて下さいお嬢様。この方は間違いなくグールです。」

少女の問に答えたのは隣に鎮座している大きな灰色の犬だ。

（喋った…）

そちらに目を向けると犬と目が合う。

犬の視線は鋭く、その目には確かに理知的な光を宿している。

「で、でも！」

「私の鼻は確かにグール特有の死臭を感じ取っています。間違いありません。この方です。」

少女の言葉を遮るように犬が言葉を発する。

そこまで聞いた少女は、恐る恐るといった感じでこちらに話しかけたきた。

「貴方は…グールなんですか…？」

さてどうするか。

相手に何の意図があつて尋ねてるのか分からない以上、おいそれと返答できる質問ではない。

害意があつた場合、少女の方は警戒するまでもないだろうが、犬の方はそういう訳にもいかない。

超大型犬と言つても相違ない犬だ。

あの大きな顎で噛み付かれたらひとたまりまりもないだろう。

俺は無意識の内に腰を低く構えてしまう。

そんな俺を見てか、犬がまた口を開く。

「お客様、我々は貴方に危害を加えるつもなど一切ないのです。警戒する必要は御座いません。」

そう言われても先刻出会ったばかりの間柄だ。簡単に信じられる訳がない。

「本当ですよ？もしも貴方が人間でも、このまま帰ってもらうだけですから…」

（どうするか…）

このままでは埒が明かない。

あの犬から逃げることは難しそうだし、体格から見ても、実力行使に出られたら敵わないのは目に見えている。

今は彼らの言葉を信じるほかないだろう。

（あの犬にはグールだということもバレているみたいだし、ここは正直に答えておくか…）

俺はそう考えて首肯する。

「だから言っただけではありませんか、お嬢様。この方は間違いなくグールです。」

「驚きました…どう見ても人間なのに…」

そう言っただけ少女はしばらくポカーンとしていたが、急にスイッチが入ったかのように喋りだした。

「お、お客様！大変失礼いたしました！お部屋は既に用意してあります！私のあとに付いて来て下さい！」

言うが早いか少女はすぐに歩き出してしまった。

困惑する俺に犬が声を掛けてくる。

「先ほど申しました通り、我々に害意は御座いません。貴方様をお客様としてお招きしたいだけなので御座います。理由は後ほど必ずや説明いたしますので、何卒。」

そう言うと犬は玄関と俺の間に素早く陣取ってしまった。

こうなっではお手上げだ。

本当に害意はないようだし、ここは大人しく従うことにしよう。

俺はそう結論づけて少女のあとに付いて行く。

少女の背丈は俺の胸に届くか届かないくらいだ。

俺に気を使ってか、小さな歩幅を補うために早足で歩いている。目の前を懸命にトコトコ歩く姿はとても微笑ましい。

そんな事を考えていると、少女がとある部屋の前で足を止める。

「ここがお客様のお部屋です！何か用があるときはいつでも私を呼んで下さい！」

そう言って去って行った少女の顔はなぜかとても緊張しているように見えた。

部屋は手入れが行き届いていて、家具類に埃が積もっているなんてことはなかった。

窓から見える景色も綺麗で、今まで通って来た森の背後には遠くに山が見える。

これだけ見れば絵画かなにかのようだ。

大方の搜索を終えて一息つく。

罫の類は発見出来なかった。至って普通の部屋だ。

俺は次に少女を部屋に呼ぶことにする。

俺が招かれた理由を尋ねたいからだ。

あの犬の方が事情に詳しいかもしれないが、密室で二人きりになるのは心理的に避けたい。

あまり考えたくはないが、あの少女ならいざというときの人質になるという利点もある。

少女がどこにいいのか分からないので、仕方なく廊下に向かって叫び声を上げることにする。

もちろん「すみません」という意味を込めてだ。

すると数十秒もしないうちに少女がやって来た。俺の叫び声を聞いたせいか、先程よりも表情が強張っているように見える。

俺は話す事が出来ないので、文字を書くジェスチャーで少女にペンを要求する。

少女はしばらく首を傾げていたが、思いついたかのような表情をすると、どこかに走り去って、すぐにペンと紙を持って戻って来た。

ペンと紙を受け取って試しに文字を書いてみる。

（やっぱり書けた…）

案の定、俺はこの世界の文字を書けるようになっていた。

聞くことも読むことも出来るのだ、書くことも出来るだろうと思っていたが、予想は外れてなかったようだ。

紙に丁寧に文字を書いて、それを少女に見せる。

「（少しお話しいですか？）」

少女は少し迷う素振りを見せたが、快く承諾してくれた。

ヴァンパイアがあらわれた！

俺と少女は丸テーブルに向かい合うようにして座っている。
俺が部屋へ招き入れたのだ。

「貴方をお客様として持て成すのは、お祖父様の意思によるものです。」

少女は見た目に不釣り合いなしっかりとした口調でそう答えた。

どうやらそういう事らしいが、俺にこちらの世界で知り合いなどいるはずもない。

会ったこともない老人に歓迎されるなどおかしい話である。
謎は深まるばかりだ。

「（そのお祖父様は今どこに？）」

俺は端的にそう質問した。

この城に到着してから見かけたのはこの子とあの犬だけだ。
まさかあの犬が祖父というわけでもないだろう。

「お祖父様は…半年前に亡くなりました…」

少女は表情を暗くしてそう答える。

どうやらまずい事を聞いてしまったらしい。

少女は暗い表情のまま語り続ける。

「お祖父様は…優れた預言者でした…」

『紅き月が六度満ち欠け、救国の英雄が光臨せし時、その者は遣つて来る。死臭を撒き散らし、森の奥より舞い戻るは、我らが待ち望みし不死の王。畏み迎えよ。小さき火の粉はやがて燃え上がる大火となりて魔を穿ち、渴望は癒されることだろう。』

これがお祖父様が死ぬ直前に残した預言です。預言が的中するとは限りませんし、内容は半分も理解できませんでした。しかし、お祖父様が亡くなってから半年、グールの貴方がこの城を訪れた。そうならば私達も貴方を迎えない訳にはいきません。貴方が来ることが分かってから、急いで出迎えの準備をしたんです。」

少女の言葉が事実なら、害意が無いというのは本当だろう。問題は信じるかどうかだ。

少し考えて、俺は少女の言葉を信じることにする。

こないたいけな少女が表情ひとつ変えずに嘘をつくとは思えない。間違っていたら、俺の人を見る目がなかったと諦めるしかないだろう。

しかしなるほど、この預言あつてのあの問答か。グールであることに拘ったのはこの預言のせいだったらしい。

それにしてもこの世界にも預言なんてモノもあるのか。

元の世界では眉唾ものだったが、この世界ではそうでもないらしい。

『死臭を撒き散らし、森の奥より舞い戻るは、我らが待ち望みし不死の王。』

不死の王かは大いに疑問だが、恐らくこれは俺の事だ。

この少女の祖父が亡くなってから半年というのは『紅き月が六度満ち欠け』の部分だろうし、確かに預言は当たっている。

どうやら預言が全くのデタラメなんて事はないようだ。

そしてその預言に従って、この少女とあの犬は、俺を『畏み迎えた』

わけだ。

考える俺に少女が声を掛けてくる。

「あの…私の名前はソフィア・サンハイルと申します…貴方の名前を聞いてもいいでしょうか？」

そういえばまだお互い名乗っていなかった。

俺は自分の名前を書き出そうとしてふと手を止める。

この世界で日本人丸出しの名前を使うのはおかしい。

この少女達には俺が異世界から来た事を告げていないから、不審に思われるだろう。

そこで俺は自分がグールになった時に記憶を失った事にする。

こうすればこの世界の常識を知らなくても不審がられないだろうし、記憶喪失を理由に色々と聞きだせる。

我ながらナイスアイデアだ。

「（実はグールになった時に記憶を失ってしまったて…今はルークと名乗っています…）」

名前は今即興で考えたものだ。

「グール」から濁点を取り反対から読んで「ルーク」。

即興で考えたにしては良い名前が浮かんだ。

今日の俺はいつもより冴えているようだ。

「そうなんですか…それにしてもこのルークという名前…自分で考えたんですか…？」

俺は首肯する。

「もしかして…グールが由来…？」

俺はもう一度首肯する。

「プツ…アハ、ハハハハ、」

すると少女が突然笑い出してしまった。

一体どうしたのか、困惑する俺を前に少女は笑い続ける。

「アハ、アハハハハハ、ご、ごめんなさい、本当に、アハハハハハハハ、」

少女は腹を抱えて尚も笑い続ける。

「ハハハハハハ、ウツ、はあはあ、」

ひとしきり笑った少女は肩で息をして呼吸を整える。

「ごめんなさい…貴方の名前を笑うつもりはなかったんですけど、あまりにも可笑しくて、つい…許してくれますか…？」

笑いすぎてせいか、瞳に涙まで溜めてそう言ってくる。

もとより怒ってるわけではないので俺は首を縦に振る。

子供に名前を笑われたくらいでどうこうなる俺の心ではない。微妙に瞳が潤んでいるのは少女に釣られたからだ。断じて名前を笑われたからではない。断じて。

「玄関ホールで私の隣にいた狼を覚えていますか？」

あれは狼だったのか。

犬だとはかり思っていたが、なるほど、言われてみればあの鋭い顔つきは狼のものなのかもしれない。

そんな事を考えながら首肯する。

「あれは夜狼のワルフです。お祖父様に命を救われてからこの城に仕えています。ワルフというのはお祖父様が名付けたものです…言い訳になってしまいかもしれませんが…貴方のあまりにも安直な命名がお祖父様とそっくりで、つい笑ってしまっただけです…」

（安直…）

安直と言われてしまった。

ますます瞳が潤んでくるが、泣くことをプライドが許さない。

俺は必死に涙を堪えながらペンを走らせる。

「（名前の事は気にしてません。それより、夜狼とはなんですか？）」

「

「夜狼は獣族の一種です。」

「（獣族とは？）」

「まさか…ほとんど何も覚えてないんですか？」

「（常識と言われる事も含めてほとんど…）」

少女は驚いた顔で俺を見るが、すぐに説明を始める。

「それじゃあ一から説明しますね。この大陸には私達夜族を含めて五種類の種族が住んでいます。夜族、獣族、妖族、竜族、人族です。グールである貴方は…厳密には違いますが、恐らく夜族と言っていると思います。」

「（君も夜族なの？）」

そう質問する。

目の前にいるのはどう見ても十代の少女だ。

しかし少女は「私達夜族」と言った。

名前からして人族に人間が分類されると思ったが違っらしい。

「はい、私はヴァンパイアですから。」

少女は誇らしげにそう答えた。

どうやら人間が人族に分類されるのは間違いないようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6957y/>

へんじがない、ただのしかばねのようだ。

2011年11月27日16時54分発行